

たといそうでなくとも

2026 年 9 月 6 日

ダニエル書 3:17-18

本日は旧約聖書のダニエル書が開かれています。何故本日がこの箇所かというと、週報でもご案内していたように、9 月は信徒証し月間となっており、織田兄がトップバッターとなりました。牧師でいらしたお父様の韓国でのお働きを聞かせて頂くことになり、そこで思い浮かんだのが、1972 年、54 年前に出版された「たといそうでなくとも」という、安利淑（アン・イースク）姉の回想が綴られた本でした。

彼女は太平洋戦争下、朝鮮での日本の軍事政権によるキリスト教弾圧、神社参拝を拒否して、帝国議会の議場で告発文を投げ入れたことにより逮捕され死刑宣告を受けました。しかし、終戦により釈放され渡米するまでの回想が記されています。6 年余の壮絶な獄中生活でしたが厳しい拷問に耐え、そこでも証しされ、同獄者が救われたり、主なる神の恵みを体験されました。その本のタイトルは、本日開かれたダニエル書 3 章からつけられたもので、「たといそうでなくとも」というものでした。安利淑（アン・イースク）姉、そしてダニエル書から確固たる信仰の真髄を皆様と共有したいと思います。

ダニエル書が記された目的は、アンティコス 4 世の圧政下、ユダヤ人が大切にしている安息日や割礼を禁じ、エルサレム神殿にギリシャの神ゼウス像を置いて偶像礼拝を強制しており、そのような中でユダヤ人を激励するために書かれたものです。内容として前半は、主なる神に忠実である者が異国の宮廷でどう生きるかということが描かれており、後半は、その状況の中で神がどのように導くかが示されています。紀元前 6 世紀、ユダ王国がバビロンという大国に占領され、住民の一部が捕囚の民として連行され、その中には、少年ダニエルと三人の若者たち、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴ（神を敬う意味の名前）が含まれていました。

彼らはネブカドネツアル王の金の像＝偶像を拝むことを強要され、従わなければ燃える炉の中に投げ込むと脅迫されましたが、拒否したので炉に投げ込まれることになったのです。しかし、神は青年たちを救い出してくださり、無傷で生還することができました。新約聖書・使徒 5:29「ペトロとほかの使徒たちは答えた。『人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません』」の御言葉を思い浮かべるものです。彼らは異国の権力の只中にあっても、主なる神への信頼と従順を貫き通し、信仰に忠実であり続けた姿が描かれています。

偶像礼拝

この書においての一つ目のポイントは、偶像礼拝の問題です。偶像礼拝とは、唯一の主なる神を拝むのではなく、人間が自分の都合のよいように作った他の神と呼ばれるものを拝むことをいいます。旧約聖書においては、イスラエルの民が度々偶像崇拝という罪を犯し、神に罰せられる場面が多く登場しています。本日の箇所でも、バビロンに捕らえられた捕囚民の多くも、バビロン王の命令に従って金の像を拝んだことが記されています(3:7)。

新約の時代、パウロは偶像礼拝について1コリント 10:19-21 にて、偶像に関して形だけではな

く、実質的に霊的にその罪を行なっていると指摘しています。「・・・偶像に献げる供え物は、神ではなく悪霊に献げている、という点なのです。わたしは、あなたがたに悪霊の仲間になってほしくありません。・・・主の食卓と悪霊の食卓の両方に着くことはできません」と語っています。日本では八百万の神が存在しており、また、昔からの風習に囚われながら暮らして、意識せずに偶像を拝んで罪を犯していることを知る必要があります。このことはまた別の機会に見て参りたいと思っています。

「たといそうでなくとも」と委ねられる幸い

さて、本日注目したいのは、「わたしたちのお仕えする神は、その燃え盛る炉や王様の手から私たちを救うことができますし、必ず救ってください。そうでなくとも、御承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拝むことも、決していたしません」(3:17-18)、「そうでなくとも」という言葉に集中したいと思います。

ネブカドネツアル王の命令を拒み、神のみを礼拝していたため3人は捕らえられ王の前に引き出されていきます。もし、金の像を拝まなければ燃える炉の中に投げ込むと迫られた時、主なる神を信じきるといふ彼らの宣言です。それは、「たとえ」自分の期待や要求と異なっている、従い通すということです。「たとえ」神の御心が殉教することをよしとされるなら、従い通すという宣言です。自分の思い通りのことが起こらなくても、それが神の御心と信じ、神への信頼と従順は変わらない、それが信仰の真髄であるということを教えられます。神は最善以外はなさらない、「たとえ」それが自分の思いと違っていたとしても、それが神の御心なら、受け入れるという覚悟とでもいいでしょうか、それが、「たといそうでなくとも・・・」という信仰の表現です。

1ペテロ 4:19 において、迫害を受けているキリスト者に向かってペトロはこうに語っています。「だから、神の御心によって苦しみを受ける人は、善い行いをし続けて、真実であられる創造主に自分の魂をゆだねなさい。」人生は順風満帆という訳にはいかないものです。神を信じる信仰者であっても試練や苦難は襲ってくるものです。その時、どのように主なる神と向き合うかということが大切なことだと、安利淑(アン・イースク)姉とダニエルから教えられます。神は最善以下をなさらない、神の時に神の御心を必ず成し遂げてくださる、「たといそうでなくとも」という信仰が与えられ、委ねることができる神が与えられていることに心から感謝したいと思います。